

## 信仰の個人主義を探す—発端：科学への妄信を越えるために

木俣美樹男（植物と人々の博物館）

A Pursuit of my Individualism of Religious Belief;  
the Epilog for Exceeding any Blind Belief to the Science

Mikio KIMATA, Plants and People Museum

永遠にたたかわねばならぬ。神といえどもたたかっているのだ。

虚無は神を取り囲むが、神は虚無を打ち倒す。

そしてこのたたかひの律動こそ最高の階調なのだ。

この階調は死ぬ運命にあるおまえの耳には聞き取れない。

おまえはただその存在を知りさえすればいいのだ。

おまえは自分の義務を心静かに果たすがいい。

そしてあとは神にまかせるのだ。

(R. ロラン 1912、『ジャン・クリストフ』第9巻より)

### 1. はじめに

私は科学者であるから、必然的に無神論者として日本の世間一般的には合意される。東海教会の幼稚園1年間はマリア様のもとで過ごした。新旧聖書、幾冊かの仏教書やコーランは少し読みかじった。正月は自宅近所の深大寺に初詣に行く。神社の天神地祇や聖人、路傍の地藏尊、馬頭観音、山の神などの祠にはちょっと一礼もする。海外調査や観光旅行の際には、仏教寺院、ヒンドゥー寺院、ラマ寺院、ジャイナ教寺院、イスラム教モスク、キリスト教大聖堂・小聖堂を訪ねて、人々の信仰に対して敬意を表する。

私はこのように宗教者ではないが、信仰は人生の行動規範を決めるためになくしてはならないものだと考えている。如何なる宗教教派あるいは政治党派にも属してはいないが、信仰心は篤いのだと今ではやっと決心している。だからこそ、何人も神の名において人々を殺すなど言う。戦乱に明け暮れる諸宗教の不寛容、いまだに続くヒンドゥーのカースト差別、贅を尽くす仏教の形骸化、絶望的に退廃した末世カリユグにお

いては、ただカミガミに祈るしかないのだろうか。心篤い者がそれでも諦めずに人々を救援し、幸福の手助けをする思想行為は個人の信仰や信条ではないのか。この信仰や信条はどの宗教・宗派においても、それぞれ原初に人々がそれぞれの神々に求めたことは共通していたのではないのか。本当にそうだったのだろうか。

科学と信仰の関係については多くの先哲が考え抜いてきた。科学者は必ずしも学問を求める哲学者ではない。学問は個人の自律を鍛錬し、人生を磨くものだ。それでも、現代の科学の有様が人々にどのような便利を与え、一方で無意識、非情にどれほどの仕打ちをなしているのか疑問をもって、学生のころから考え続けてきた。「本来の科学」と「妄信される科学」、および、歴史によって洗練されてきた「宗教」と「妄信の宗教」、さらには「信仰」の有様を、個人私的な想いをもって深く考えてみたい。この思索・論考は、生きている限り「解脱」できないと観念するので、肉体的に思考ができなくなる時まで続くことになる。本エッセイはプロローグとして当座の論題を提示する。

人間の存在は、肉体と心よりなる。

1) 肉体 (body, physical) は、次の物事を求める。

①食欲；身体維持、美食、②性欲；欲望、家族、愛情、③拝金；利得、④名誉；自尊、保身、権力、⑤審美；美しさ、⑥野生；自然、⑦信仰；祈り、願望。

2) 心 (heart) は、次の見えざる心性・知情意という事象よりなる。①精神、意思 (mind, mental)、②知識 (intellectual, knowledge)、③霊魂 (spirit, spiritual)。

人間は個人を生きるのだが、家族、友人、知人など、個人を支える人々があって、人生は充たされる。20歳のころ、最も感銘を受けた小説に、『ジャン・クリストフ』(ロラン 1912) や『内面への道—シッダールタ』(ヘッセ 1931)がある。今読み返してみると、前者の献辞には「すべての国々の、悩み、闘い、そして遂には勝つであろう自由な魂に捧ぐ」とある。また、後者の献辞には「尊敬する友ロマン・ロランにささげる」とある。この文庫訳本は高校正門で出会って5年目の1969年7月吉日に2冊求めて、現在の妻女に贈った。

また、ロランは『ベートーヴェンの生涯』(1902)の序で次のようなことを述べている。要約すると、「私は英雄について定義した。英雄と呼ぶのは、心によって偉大であった人々のみだ。心は単に感受性の区域だけのものではなく、内部生活の広大な領域と考えている。この領域を自由に支配して、これらの根源的な諸力に拠っている英雄こそ、敵の世界に抵抗し得るのである。自分の英雄について私がはじめて考えた時、ベートーヴェンというモデルが自然に浮かんできた」。ちなみにこの文庫訳本は1970年の誕生日に、心の兄妹を契った大野さんから、ベートーヴェンのように生きるようにと付言して贈られた。

現在、信仰の先は自然であり、幸せは美しい自然に寄り添う時間を持ち、想い人を大切に暮らすことだろう。心身が暮らす糧の一部は自ら作り給し、分かち与え合い、足るを知り、人生を充たすことだろう。近代以降の大方の人間は、野生動物のようにただ生きるのではなく、さら

に支配される者として暮らすのでもなく、自由な人生を求めて、行動するようになった。もちろん、ギリシャ時代でも自由に思索する哲学者はいたが、彼らは飛びぬけて優れた例外であった。しかし、近代以降は、多くの人々が自由を求め、自由は拡大してきた。

これを支えたのは批判的精神である。批判的精神とは、現実の事象に課題を見つけ出して、改善しようとする方法論である。現状に浸るのではなく、部分肯定的ながら、よりよくするために部分否定的に課題を検討するのだ。かなり自己充実していても、他者を思い、改善のための課題を見つけようとする。それは市民、すなわち社会的大人の誠意であり、任意的な責任でもある。自由意思によるもので、その心は義務的な強制を受けない。

それでも、現状に浸り、後退する社会に対して抗っても、なお力およばない時には、何らかの信仰により、祈るしかないのだろう。祈りが唯一最後の希望とするのなら、何に対して祈るのか、その信仰の先方は何なのか。信仰は心の構造にとって、宗教以前の原初的な要素だろう。生きる糧を生み出す源泉だろう。

手塚 (1989) は『ガラスの地球を救え』のなかで次のように問うている。「科学の進歩は、本来人類に幸福をもたらすはずだった。ところが、いまは地球を痛めつける悪い奴になってしまった。人類はまだ野蛮時代なのかもしれない。環境汚染や戦争をやめない限り、野蛮人というほかない。何としてでも地球を死の惑星にはしたくない。未来にむかって、地球上のすべての生物との共存をめざし、むしろこれからが、人類のほんとうのあけぼのなのかもしれない」。彼の『火の鳥』(1954～1988) や『ブッダ』(1972～1983) などの作品、および同じく『風の谷のナウシカ』(宮崎 1984) や『もののけ姫』(宮崎 1997) などの作品も、人類の過去から未来を照らし出そうとしている。

人びとはこれらの漫画やアニメーション作品に大いに感動するが、現実に向きあい行動に移すことは少ない。それでも、悔しいかな、私が専攻する民族植物学は人々に感動を与えるなど

ほぼ皆無、さらには行動を促すことなど思いも及ばない。このくにの今風の人々は学ぶことから逃げていたのか、あるいは学び方を忘れたのか。現代の制度としての学校は自ら学ぶ本質、学問を企図して亡失させてきたのかもしれない。

## 2. 宗教の概要

宗教・宗派はあまりに多様であり、実に長い歴史を有するが、まず『世界宗教大事典』（山折監修 1991）に基づき、その概要を創始年代順に伝播に配慮しながら次に記し、さらなる思索・論考の基準としておきたい。

アニミズムは、万物に宿り、宿ったものから独立して存在しうる霊魂や精霊に関する観念・信念を意味している。霊魂は人間のみでなく、動植物、自然物、自然現象にも宿るとしている。アニミズムは原始未開社会や原始宗教の特質であり、現代社会や文明宗教においてはその意義と役割を著しく失うと考えられてきた。しかし現代の諸宗教においても、その基層部分にはアニミズムが濃厚に見られる。

拝火教はゾロアスターがイラン北東部で創唱した（前2000年紀から前7～前6世紀で、不明確）。火を神化して崇拝する信仰の総称で、聖典はアベスター。10世紀以降、教徒がインド、パキスタンへ移住した。

ユダヤ教は前2000年紀初頭に、神に選ばれたヘブライ人アブラハム（遊牧民）が、彼の子孫にカナン（パレスティナ）の地を与えるという神の約束を受けて移住してきた。エルサレム（シオン）をもっとも重要な聖地とする信仰。ユダヤ教の教義は民族史のなかで生じた事件と関連して形成されてきた。ラビの時代のユダヤ教を経て、ユダヤ人は世界の情勢を受けて世界各地を流転した。前4世紀末、アレキサンドロス大王の東征によるヘレニズム化はユダヤ教を禁じ、5世紀初頭にはキリスト教を国教とするローマ帝国に弾圧された。ペルシャ時代以降、ユダヤ人は世界各地に離散民として移住した。19世紀後半には帝政ロシアの迫害により、多くのユダヤ人がアメリカに逃げた。第2次世界大戦後、シオニズムに基づく新生ユダヤ国家イス

ラエルが独立した。

仏教は仏陀の説いた教え。前5世紀頃、インドのガンジス川中流地方に興った。仏陀釈迦牟尼の説法に基づき、人間の煩惱の解決の道を教える。仏滅100年頃から部派に分裂し、部派仏教の時代に入ったが、1世紀頃それに批判的な大乘仏教が興った。東南アジアのパーリ語仏典による上座部仏教は、前3世紀に伝道されたスリランカを中心に、タイでも信仰されている。大乘仏教はインド北西部から中央アジアを経て広まり、漢訳仏典により中国、朝鮮、日本の東アジアにおいて信仰されてきた。チベット語仏典による大乘仏教はネパールやチベットにおいて信仰されている。インドの仏教は13世紀初頭にトルコ系イスラム教徒の弾圧で、教団が破壊され滅びた。現代に入って、新仏教徒と呼ばれる宗教社会運動がアンベードカルらによって起こり、仏教の復興が進んでいる。欧米にも日本の禅、スリランカの大菩提会、チベット移民による宗教活動があり、教徒や思想的共鳴者がいる。

ジャイナ教は、インドで前6世紀頃にヴァルダマーナの起こした宗教。仏教と同じく、ヴェーダの教義を否定し、一種の無神論であるが、倫理的色彩が濃く、とくに苦行、禁欲、不殺生アヒンサーを重んじる。1世紀頃、白衣派と裸行派の2つに分裂。聖典はシッダーンタまたはアーガマと呼ばれる。インド以外にはほとんど広がらなかったが、2500年にわたってインド文化に影響を与えてきた。白衣派はグジャラート、ラージャスターンおよびムンバイに多く、裸行派はほとんど南インドに集中する。カルナータカ州には例外的に農民もいるが、ほとんどは商業関係の職業をもつ。

ヒンドゥー教はインド国民の大多数が信奉している渾然とした宗教・文化の複合体に対する便宜的な呼称で、明快な定義はむずかしい。呪物崇拝・アニミズム・祖先崇拝・偶像崇拝・汎神論哲学などの諸要素を含み、多くの宗派に分かれる。ヴェーダ経典に基づくバラモン教を前身（前1200～500年）とし、各地の土着信仰を取り入れ、ヒンドゥー教は4世紀頃に確立した。のち、大乘仏教の影響をも加え、5世紀か

ら10世紀にかけて発展した。その後、イスラム教・キリスト教が入るに及んで一時衰退、19世紀にヒンドゥー復古主義による宗教改革運動があって再び隆盛に向かった。ヒンドゥー教はインド中心とはいえ、商人や移民によってスリランカ、インドネシア、ネパールなどに伝播し、今日も信徒がいる。

キリスト教は、イエスをキリストと認め、その人格と教えを中心とする宗教で、旧約・新約聖書が経典である。正義と慈愛とに満ちた父なる神、人類の罪、キリストによる贖罪を説く。キリスト教はパレスティナに起こり、イエスは前7年から前4年の間に生まれ、30年ほど活動した。キリスト教は地中海世界に広がり、ローマ帝国の国教となった。7世紀前半に中央アジアから中国に伝播、13～14世紀にインドに伝道、16世紀にはアジア伝道が本格化し、1542年にイエズス会のザビエルがインド西岸のゴアに来訪し、その後、フィリピン、日本(1549年)にまで至った。17世紀にはアメリカに伝わり、現在は欧米のほか、ほとんど世界のいたる所に信徒を有する。

イスラム教は610～632年頃、ムハンマドが創始。ユダヤ教、キリスト教と同系の一神教で、唯一神アッラーと予言者ムハンマドを認めることを根本教義とし、その聖典はコーランである。教えは、シャリーアとして体系化され、教徒の日常生活や人間関係のあり方、種々の社会制度から国家の統治までを規定している。ムスリム(信者)は8世紀には中央アジア、北西インド、北アフリカ、イベリア半島を征服した。13世紀末から15世紀にかけて、東南アジア、インドネシアやフィリピンにも拡大した。法学・神学上の違いから、スンニ派とシーア派に大別される。中世には、オリエント文明やヘレニズム文化を吸収し、独自の文明が成立、哲学、医学、天文学、地理学などが発達し、近代ヨーロッパ文化の誕生にも寄与した。三大聖地はメッカ、メディナおよびエルサレムである。

### 3. 王国の神か神の国か—雑穀と稲のあとさきから

権力は神を必要とする。神の御名の下に権力を行使し、重い責任を回避する。一部の史実を脚色しながら、英雄に都合の良いように神話は作り変えられてきた。インドのカーストも、イギリスが近代に作り直した神話のようだ。

カーストは近代に復活させられた新たな神話ではないのかと考えた。イギリスの植民地支配の戦術としての被支配常民の間を分断して、反目を利用した。一方、インドを統一したいインドの政治権力たちからすれば、ヒンドゥー教はその統合の神話になったのだろう。日本の国家神道、天皇の利用のために日本神話を用い、常民を制御し、アジア侵略を正当化して、明治維新以来の神の国・大日本帝国を構築したことと共通する手法ではないのかと考えてみた。

したがって、近代以降のカーストは新たな支配のためにつくり直され、利用された神話であり、適度な距離で把握するのがよい。差別される側からすれば、あまりに理不尽で不条理である。一方、民族の方は、もちろんその神話も書き直されてはきたのだろうが、歴史的連続性を長らくもった実態があり、生存する人々の生活が今に続いている。

たとえば、インド亜大陸での穀物の伝播を考える場合、民族に即す方が直接的であり、カーストの関わりにとらわれない方が良いと考える。雑穀はインドでも貧しい人びとの食べ物という研究者が多い。それは経済的に貧しい「先住民」という意味であって、差別されるカーストということではない。したがって、現在、雑穀文化複合は食生活が苦しいからではなく、また、差別される食材でもなく、過去から続いてきた伝統事象というべきである。

一神教では聖人は多くいても、神は唯一だ。日本では、権力者によって聖人ではなく、いくらかでも神々が作られる。柳田は天皇制を守ろうとして、敗戦前後に、多民族説から稲作単一民族説に変節した。岩田(1992)や小熊(1995)の論考により、柳田国男の天皇論—民族・稲・沖縄、および長州陸軍閥、山縣有朋との関係、

内務官僚としての仕事から稲作単一民族説の出自が見えてきそう。柳田はフレイザー (1890) の金枝篇との関連から、天皇祭祀を思いつき、新嘗祭、大嘗祭と関連付けを行って、稲作単一民族説に行きついたのである。これが敗戦後の日本の政策、特に農業政策に大きな影響を与えて、稲さえ守ればよいということにした。この結果、稲の生産性は向上し、生産過剰になったが、小麦他の穀物は輸入することになり、アメリカの政策に依存して自給率は著しく低下した。とりわけ、雑穀は敗戦時に生産が増加して食糧難を救ったが、瞬く間に山村に遺存するだけで、おおよそ絶滅へと向かった。

中尾 (1967) さえイネ米は美味しいので、これを捨てた民族はなく、稲作は拡大するだろうと言い、この考えに沿った福田・山本 (1993) の照葉樹林帯の調査研究では、おおよそこれを支持する結論を述べている。しかし、そのイネ米さえ今日の日本では消費量が著しく減少し、「コメ離れ」現象が認められる。植物学の立場からすれば、心情的に穀物に優劣をつけずに、その起源と伝播、環境のなかでの生物文化的な位置を考察すべきである。栽培植物に関してはとりわけ、生物文化多様性として保全を図るべきである。生物多様性を野生種にのみ限定すべきではなく、文化多様性と一連のものとして、全体性のなかで考慮して保全するべきである。

#### 4. アニミズム

このくには地震・津波、台風・洪水、火山噴火、土石流、雪崩、雷など、自然災害がとても多い。短い人生であっても、大方の自然災害を経験するほどだ。少し長い時間軸で見れば、大災害や飢饉にも襲われる。それでも、多くの人々がこのくには暮らし続けてきた。なぜならば、厳しい自然がもたらすものは災害ばかりではなく、降雨、温泉、生物多様性、野生からの狩猟・採集、農林水産物、美しい景観など多くの恵みも伴っているからだ。

自然災害を忘れずに、これに備えなければならない。人知・人力を超えた自然の営みに対しては、その避けようのない災害被害が少なくな

るように、日々瞑想して、神やカミガミに願い、祈るしかない。日本人は「神やカミガミ」を主語として明確にしないで、「無事を願い、祈る」とよく書き記し、言いもする。これは純粋な信仰心の発露であろう。瞑想は神やカミガミに願い、祈るという行為によって、神やカミガミと対話するかのような祈りなのだろう。これは個人主義的な信仰の様態である。自ずと自然、素朴に依り自らを律する。

しかし、神社・仏閣を訪れて、金銭を賽銭箱に投げ入れる際には、利己保身のためであることが多く、必ずしも純粋な信仰心ばかりではない。作為に諂い、他者から操られ、あるいは名利に支配され、悪意ある企みを含んでいるのであろう。各地の神社に祀られている神鏡には人心の本音も映るのだろうか。

ELF 環境学習中堅指導者研修会の世界観学習プログラムにおいて、世界とは何か？ もののけ姫の世界とは何か？ カミガミの世界について考え、話し合うことを試してみるために、宮崎 (1997) の『もののけ姫』を教材にしてみた。岩田 (1992) の指摘によれば、宮崎は照葉樹文化論 (中尾 1967) とフレイザー (1890) の『金枝篇 (初版)』の思索に乗って、『もののけ姫』を描いたように見受けられる。金枝篇第3章「神殺し」は第16節もある長文である。「第1節 聖なる王を殺すこと、第2節 樹木霊を殺すこと、から始まり、第10節 動物としての穀物霊、第11節 神を食すること、第12節 神聖な動物を殺すこと」など、興味深い内容だ。

訳者あとがきによると (吉川 2003)、第2版には、初版になかった指摘が加えられており、人類の精神は「呪術」→「宗教」→「科学」という進化の過程をたどるというものだ。

要約すると、「フレイザーは、我々は宗教から科学へ至る過渡期にいるのだが、呪術から宗教への移行が自然界に対する客観的な働きかけという点では、一種の後退であったとみている。呪術師は観念連合 (連想) の重要性を正確に見て取っていた。観念連合の原理は正しく応用されれば科学を生み出す。彼は祭司よりも呪医や呪術師を高みに位置づけていた。前者は全能の

神と思われるものの前で跪くばかりだが、後者は人間の自然に対する力を信じ、何らかの形でこれに働きかけようと努めるからである。呪術の時代における客観的な世界観は、今一度、科学の時代の到来によって回復可能であるかもしれない」。

民族植物学の原理に多くの示唆を与える、人類の宗教的進化を主題とした『金枝篇』を深く読み解きたいものだ。世界についての議論、カミの生起と神の生起、いつからカミが必要になったのか？ カミは人間の心の反映か？ カミガミの争い。神がカミガミを支配する。先住民を侵略、支配するのと、同時に神が生起したのか。さらに、『風の谷のナウシカ』第7巻では、墓所を守る科学者の教団が宗教としての科学教の末路を暴いている。科学という方法論を原初に立ち返って、深く思考し直すべきだ。さらに、増上慢を昂進する科学を超える統合学の端緒を掴みたいものだ。

## 5. 信仰の個人主義

私はインド滞在で正直に生きることを毎朝瞑想し、イギリス滞在で阿修羅として生きることを意思して、世俗から遠ざかることにし、世間から黙殺されることになった。

『ジャン・クリストフ』第2巻には、「死なねばならぬお前たちは、行って死ね！ 苦しまねばならぬお前たちは、行って苦しめ！ 人間は幸福になるために生きているのではない。人間は私の掟を成就するために生きているのだ。苦しめ。死ね。しかし、お前がならねばならぬ者になれ。つまり一人の人間に」と書かれている。クリストフの神は、彼個人の死に至る苦悩の前に姿を現して、厳しく励ますのだと、このシーンにいたく感動した。私にとって、信仰の個人主義はここから始まったのだ。修羅道に生きる私はまっとうな人間になるように努めて、解脱(死)に向かうのだ。

今後、世界のカミガミと神々、そして日本のカミガミと神々について、次の項目に注目して思索・論考を進めることにしたい。

1) 自然のカミガミ；①素朴な山の神、②地祇。

2) 神話で創られた神々。

3) 偉大な人が神になる；①貢献をたたえる、②権力争いによる無念の死を鎮めるか収める。③恐れるか詫げる。

4) 現人神、応神；創られた神。

5) アジアの神々；①ヒンドゥー教、聖人、神話、②仏教、人が修業、努力して菩薩、仏になる。草木悉く仏性。③ジャイナ教。④拝火教。

6) ヨーロッパの神々；①自然のカミガミは消されたのか。②ギリシャ・ローマの神々、③一神教の神、絶対神ユダヤ教、キリスト教、イスラム教。

この思索・論考の過程で、1) 個人の信仰、2) 信仰の集団；①家族、②地域社会、③民族、④国家、国教などの関係から、信仰の個人主義をさらに深めることにする。

このくにの仏教は国政を支えるものとして輸入され、その後人々を救済する宗派として浄土宗が生まれた。特に、真宗(一向宗)の信仰の篤さを想う。信仰の故に酷い迫害を受けた。隠れキリシタンの信仰の深さにも心動かされた。ヒンドゥー教は七福神の大黒天(シヴァ神)、毘沙門天(クベラ神)と弁財天(サラスヴァティー神)として輸入されているが、イスラム教からはほとんど影響を受けてこなかった。国学・水戸学が儒教・陽明学と結びついて、明治維新国政の国家神道を糊塗した。

## 6. 信仰環境とエコロジズム

南アジアにおける信仰と植物との関わりについて考察し、アニミズムの新たな位置づけを試みたい。フィールド調査データベースおよび収集文献を活用し、日本と欧米におけるヒンドゥイズム・ブッディズムの影響を受けた信仰環境、特に植物との関わりについてエコロジズムの視点から比較研究を行いたい。

また、考古学文献などを基に南アジアで栽培されている雑穀類(アフリカ起源、中央アジア起源およびインド亜大陸起源)に関する農耕/言語伝播仮説の検討を行う。さらに、環境学習に重要な領域である信仰環境・世界観には、洋の東西を問わず、ヒンドゥイズム・ブッディズ

ムの影響が及んでいる。これまでの民族植物学  
研究の応用として、植物と関わる信仰環境とア  
ニミズム・エコロジズムに関して比較したい。

①南アジア、欧米、日本の信仰の場に関する現  
地観察記録・写真を整理する。ヒンドウイズム・  
ブッディズム・アニミズムに関する文献から「自  
然」、特に聖なる植物・聖域の位置づけを比較  
する。

②南アジア関連の環境学習研究史を文献で再検  
討する。エコロジズム・「自然観」の比較から、  
現代文明カリユグの時代の先の文明に向けた信  
仰心の姿形を考察する。特に、トランスパーソ  
ナル・エコロジー、パーマカルチャー、ネー  
チャー・ゲーム、トランジション・タウンなど  
へのヒンドウイズム・ブッディズム・アニミズ  
ムの影響を考察する。

③大聖堂、寺院、神社、祠など、聖なる建造物  
の意義、七福神、阿修羅など仏神の性質変化の  
意義、アート重視の欧米文化と自然調和重視の  
アジア文化の信仰環境を比較検討する。

宮崎駿 1995、風の谷のナウシカ第7巻、徳間書店、東京。  
宮崎駿 1997、もののけ姫、スタジオジブリ、東京。

小熊英二 1995、単一民族神話の起源－日本人の自画像の  
系譜、新曜社、東京。

ロラン, R. 1903、片山敏彦訳 1938、ベートーヴェンの生涯、  
岩波書店、東京。

ロラン, R. 1912、新庄嘉章訳 1963、ジャン・クリストフ、  
集英社、東京。

ロラン, R. 1912、新庄嘉章訳 1956、ジャン・クリストフ、  
新潮社、東京。

手塚治虫 1989、ガラスの地球を救え－二十一世紀の君た  
ちへ、光文社、東京。

山折哲雄監修 1991、世界宗教大事典、平凡社、東京。

(2016.1.9 ~ 2017.11.20)

#### これまでのエッセイなど資料

木俣美樹男 1991、環境教育としての類アニミズム、『道  
徳教育と特別活動』第8巻第1号：pp.26-29。

木俣美樹男 1992、環境教育と原生自然－種の多様性と精  
霊への興味、環境教育推進研究会編『生涯学習として  
の環境教育実践ハンドブック 21世紀に向けての地域  
のよりよい環境づくりのために』pp.137-141、第一法規  
出版。

木俣美樹男 2005、巻頭言－もう一つの阿修羅として、『民  
族植物学ノオト』1：1。

木俣美樹男 2009、アニメーションとアニミズム、『植物  
と人々の博物館プロジェクト』pp.1-12。

木俣美樹男 2010、物語の力～アニメーションを素材に生  
物文化多様性を学ぶ、『Bio City』46:86-91。

#### 引用文献

福田一郎・山本英治 1993、コメ食の民族誌、中央公論社、  
東京。

フレイザー J.G.1890、吉川信訳 (2003)、金枝篇 (上・下)  
筑摩書房、東京。

ヘッセ H.1922、高橋健二訳 1959、内面への道－シッダー  
ルタ、新潮社、東京。

岩田重則 1992、柳田国男の天皇論－民族・稲・沖縄、比  
較民俗研究 6：82-109。